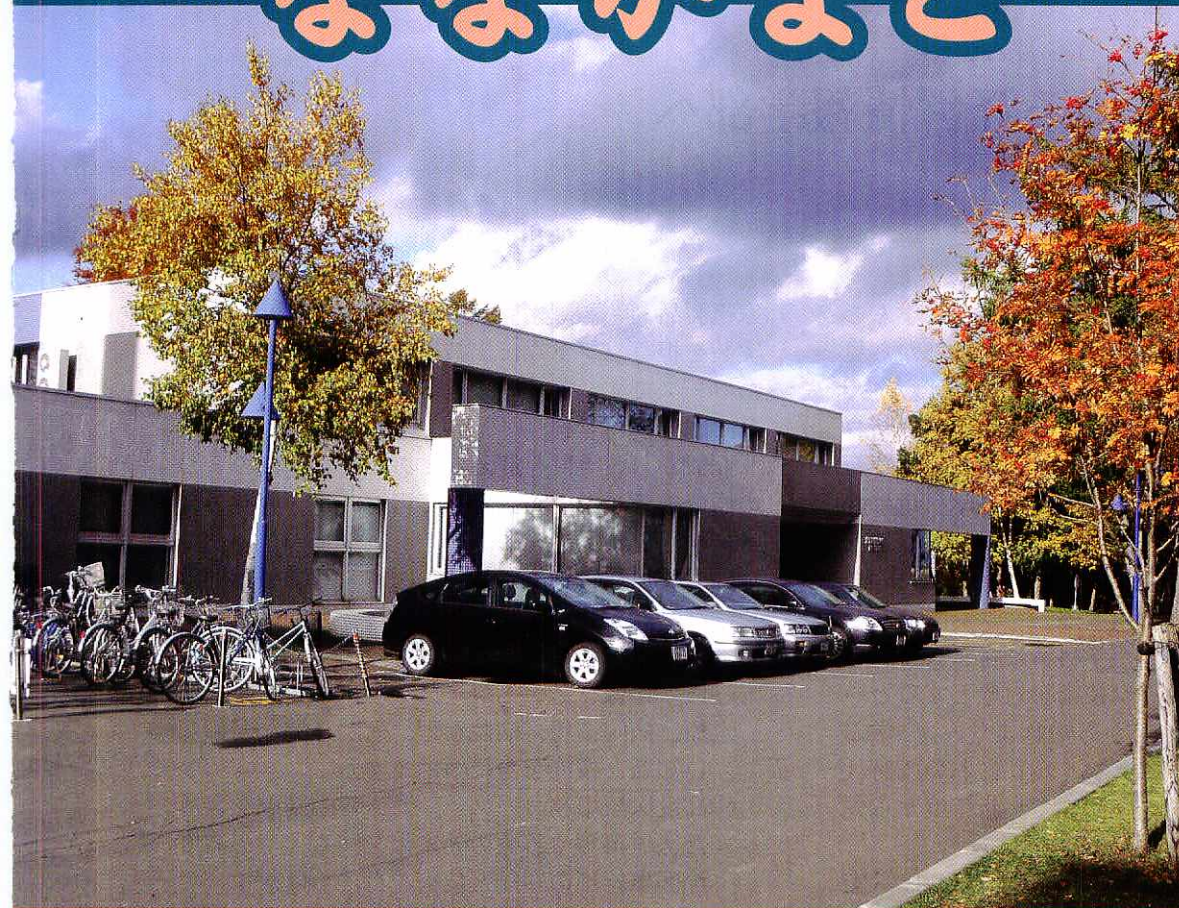




ななかまど Vol.41



松尾三郎初代理事長銅像

写真：通信教育部棟(左上)と秋の学内風景

目次

| | |
|----------------------------|-------------------------|
| ■北海道情報大学の未来を語る.....02 | ■ゴミエコチャート.....16 |
| ■大学祭を終えて.....04 | ■第19回蒼天祭.....18 |
| ■新任教員あいさつ.....05 | ■「海外事情」・アメリカ編.....20 |
| ■キャリアガイダンス講座・第2回目.....06 | ■「海外事情」・中国編.....21 |
| ■キャリアデザインIIで本学OBが講演.....07 | ■サハリンでの出会いと体験.....24 |
| ■特別講演会を実施.....08 | ■ゼミ紹介.....26 |
| ■札幌国際スキー場デザインコンペ入賞.....08 | ■クラブ紹介.....27 |
| ■Jゼミナール.....09 | ■ロナウジーニョとダウンガの街で.....28 |
| ■情報処理シンポジウムで受賞.....10 | ■留学生の宿泊研修を実施.....29 |
| ■ふるさと江別塾実施.....12 | ■日高山脈冒険隊の冒険.....30 |
| ■学生相談室について.....12 | ■ポスターあらかわる！.....30 |
| ■えべつものづくりフェスタに出展.....13 | ■学生サポートセンターより.....31 |
| ■ゴミ育部門賞受賞.....14 | ■主要行事・編集後記.....32 |





新たなる経営情報学部へ

経営情報学部長 林 雄二

経営情報学部では、学生がより系統的に学ぶことができるように、また、教育内容が外部から見てもわかりやすいものにするために、新年度から、各学科にコースを設け（システム情報学科は新コースを追加）、経営ネットワーク学科の名称を新たにすることになりました。以下、各学科毎に変更のポイントを説明し、最後に今後学部として向かうべき教育の方向について述べることにします。

1. 経営ネットワーク学科

ネットワークという名が学科名に含まれていることで、特にネットワーク技術を対象とするというイメージを与えていたかも知れません。「学ぶ内容」「学ぶ環境」「学ぶスタイル」において時代の先を進んでいくことを強調して、新年度から先端経営学科と名称を変更します。

「学ぶ内容」には、経営とITを結びつける実践的な内容に加えて、現在注目されている「サービスサイエンス」までを含みます。「学ぶ環境」としては、e-Learningシステムを利用し、高度な内容をわかりやすく繰り返し学ぶことが特徴です。「学ぶスタイル」には、1年次から取り組む少人数専門ゼミや、一人ひとりがビジネスや情報システムを体感しながら学ぶ仕組みを含みます。このような取組の上に、今までの履修モデルを二つのコースとして充実させます。

○e-ビジネスコース：文系の視点から、経営とITを結びつける実践的な能力を持った人材の育成を目標にします。

○ビジネスプランコース：新しい事業を構想し、具体化できる起業家能力を持った人材の育成を目標とします。

2. システム情報学科

現3年生からカリキュラムとして既にコース制を実施していますが、あらたに1コースを増やし5コースで展開することになりました。既存のコースは、以下の4つです。

○ソフトウェアデザインコース

○ネットワーク・メディアコース

○知能・情報科学コース

○経営情報システムコース

新たに加えられるコースが「○ロボット・組込みソフトウェアコース」です。これは、携帯電話・

家電製品・産業機器等に組み込まれる機能の設計・実装を担うソフトウェア技術者の育成を目標にしたコースです。

3. 医療情報学科

開設から3年目を迎えるにあたり、既存の3つの履修モデルをコースとして再編成し、個々のコース科目を精選します。

○診療情報管理コース：医療・医学の専門的な知識を修得し、情報管理とその推進を実行できる技術を身につけます。

○医療情報システムコース：病気の診断、治療、病院情報、病院管理、病院経営など幅広い知識と技能を身につけます。

○高度医療事務コース：診療報酬請求を含めた医療事務や診療の効率化を図る上での高度な医事管理の知識と技術を身につけます。

4. 今後の教育に向けて

本学では、教育体制検討のグループを立ち上げ、現状の教育上の問題を議論し、新たな教育の仕組作りに取り組んでいます。そのグループで確認した指針は以下のものです。

「多様化した学生一人一人の能力を伸ばす」

経営情報学部として（もちろん大学全体としても）、学力の幅はもちろん、興味関心も多種多様な学生の能力を、最大限に伸ばすことに一層努めていく積もりです。今以上に活気あふれる大学にしたいものです。学生が皆、何かに夢中になっている、例えば、大学内外でのコンテスト、カリキュラム外の活動、学内いたるところでプロジェクトや課題などに取り組む姿が見られるような大学を目指します。

形だけの単位取得ではなく、実質的に力を付けることが結局は学生の為になるはずで、資格取得を目指すことも、個々の能力を伸ばす手段として有効です。一方では優秀な学生にはさらに能力を伸ばすような、特別なチャンスを与える対応も必要でしょう。

学生と接していると、自らを伸ばしたいという意欲を感じるが多々あります。学生の潜在的なやる気を、いっそう引き出していきたいと考えています。

情報メディア学部における 新カリキュラムと人材育成について

情報メディア学部長 中岡快二郎



情報メディア学部の近未来に対応するためのカリキュラム構成について簡単に説明する。

情報メディア学部が創設されて7年になる。この間、IT社会は急速に進化し、インターネット関連の業界もより一層の専門化が進んでいる。すなわち、インターネット上で、マルチメディアデータを駆使した高度なコミュニケーションを可能にするための、DTP、コンピュータグラフィクス、アニメーション、画像、映像コンテンツの作成も、従来のWebコンテンツの枠を超えた専門性が必要になってきた。また、インターネット関連の技術分野でも、Webアプリケーション開発、Webサーバの構築、ネットワーク管理とセキュリティの技術者およびモーショキャプチャ、3次元スキャナやCADなど高度な画像あるいは映像処理ソフトなどを扱うことのできるメディアエンジニアの育成が必要となってきている。

このようなインターネットを中心としたIT環境の急速な変化に対応し、将来への展望を開くために、今年度情報メディア学科にメディアデザインとメディアテクノロジーの二つの専攻を設置した。各専攻の特徴は下記の通りである。

[メディアデザイン専攻]

インターネット上で多彩な情報発信とコミュニケーションを行うためには、文章表現、画像処理、映像制作、コンピュータグラフィクス、アニメーション、音響などのデジタルコンテンツを作成する必要がある。したがって、メディアデザイン専攻では、多様なデジタルコンテンツをデザインし作成する手法、およびコンテンツをインターネットに適した形式でコーディネートできるWebデザインを学習することができる。ここで修得した手法、技術はWeb関連だけではなく多種多様な分野で応用できるので、幅広い分野に人材を送り

出すことができる。

[メディアテクノロジー専攻]

比較的簡単なデジタルコンテンツは、デザインが完成すれば関連するソフトを使うことで、コンピュータに関する知識が深くなくても作成することができる。しかし、CAD、モーショキャプチャあるいは3次元スキャナなど特殊な画像、映像を作成するには、特殊なソフトを利用するためコンピュータに関する知識が必要とされる。このような高度なメディア作成技術者を育成することが一つの目標である。

また、多彩なデジタルコンテンツをインターネット上で安全に配信するには、Webアプリケーション開発、データベース、Webサーバの構築、インターネットとセキュリティなどに関する技術が必要となる。また、メディアテクノロジーの二番目の目標は、このようなWeb技術を習得した人材を育成することである。

このように、情報メディア学部では、Webの領域を超え、さらに広い分野で活躍できる人材を育成するためのプログラムにも対応している。

また、情報メディア学部では、専門性の高い人材を育成するだけでなく、実社会に入って退職するまで人生を生き抜く社会人として必要な基盤を培うために、在学4年間の様々な機会を利用して、次のような理念に基づく教育を行っている。(1)常に問題意識を持ち、それを解決するためのアプローチを経験させる。(2)学習した内容を自分の言葉で文書化し、多くの人に分かりやすく説明することを体験させる。

これらのことを少しでも体得した多くの学生を社会に送り出すことができれば、北海道情報大学の未来が開けるものと確信する。



第19回 蒼天祭を終えて

学生部長 長井 敏行

この世はひとつの舞台であり、人は男も女もみな役者なのだ。この言葉の通りであれば、人の一生は、ひとつの舞台の上で演じる役者のようなものである。いつどんな役が回ってくるかは、誰もが予知不可能である。人生は、舞台だ、祭りだ、わっしょい！ わっしょい！ どうですか。乗りましたか。祭りの輪に入って、盛り上がりましたか。蒼天祭(命名後15回目)は、友達の絆を強めるための仕掛けである。祭りを鍋にたとえれば、ひとつの鍋をつついた、いわば同じ釜の飯を食った仲間である。それは親しみを示す表現でもあろう。諸君、鍋を楽しみ、お互いに親しみを持てましたか。

初日10月7日(日)の午前中には、約450名から500名の参加者、そこから一日の延べ人数を推し量ると、単純に言えばその倍である。しかも、初日の15時30分には、KOTOKOのSO-Ten LIVEで、講堂が超満員(600名ほど)になる盛況であった。そこに、オープンキャンパスに参加した120名ほどの高校生が中庭(正式名称はない)の模擬店で食事をしたのだからたまらない。情報大の人口密度は、いきなり都心部並みである。

それにしても、中庭で行われたクイズ大会、フードバトル、ファッションコンテストは、それ自体も面白かったが、秋晴れの中、司会者(二人)の進行は、さわやかで、出演者の持っている特徴を引き出すのがうまく、しかも参加者の関心をひきつけ、十分に堪能できた。最後に出ていたダブルダッチの直前、音楽に合わせたパントマイム風の芸は、特に、圧巻であった。落書きボードの落書きも興味津々、「過去を殺せ(kill the past)」から「君がくれた勇気はおくせんまん、愛してるーラララー、竜巻相手じゃ意味がない」などまで、シリアスなものから意味がわからないものまでさまざまなものがあった。

KOTOKOのSO-Ten LIVEには、度肝を抜かれた。30年ほど前、大学祭で尾崎亜美のLIVEを見学したことがある。そのときの音の大きさにもびっくりしたが、それを超える音量とリズムにはあっけにとられるばかりだった。それ以上に、リズムとい

い感性といい、隔世の感がする。団塊世代の感性を形作ってきた常識が遠くなりつつある。そんな感じがした。情報大ライブバンド・ボーカルもリズムの取りかたといい、音量といい、大満足した。

ゼミ展は、ゼミ活動に広く関心を持ってもらい、蒼天祭を盛り上げる、なくてはならない展示である。どのゼミ展も、並々ならぬ努力の後が伺われる。しかも、コンテスト付である。総合創作サークルの雑誌は、学生の感性があふれていて、一読する価値があった。模擬店もコンテスト付きである。学生の張り切りようが伝わってくる。

翌日は、BGMの大音量で始まった。今日のメーンは、ヨサコイの大乱舞。6月初旬のヨサコイソーラン祭りを見のがした人には、必見の日である。江別まっことええ&北海道情報大学の見事な乱舞を見られて幸せになった人も多いであろう。加えて、最後に各チームが一緒に踊った舞台、その舞台からあふれた踊り手が前と横に広がって、見せた大乱舞、見ごたえがあった。すべての日程は終了した。

しかし、仕事が残っている。実行委員会、模擬店出展者、展示出展者は、午前2時ごろまで後片付けをしていた。その日は、朝から授業が待っている。余韻を楽しむ暇もない、きつい1日であったであろう。諸君には感謝する以外の言葉が見つからない。毎年、参加者を増やすため悩んでいることであろう。予算があれば、一般市民を相手にモギモギ券を先着100名様に差し上げるといような工夫も考えられるであろう。留学生を含め、蒼天祭への参加を円滑に促進するための工夫とアイデアが必要であろう。

関係各位の皆様には心から謝意を表す。ご支援ご協力ありがとうございました。



新任教員あいさつ



「はじめまして」

医療情報学科 教授 小山 芳一

はじめまして。医療情報学科・小山芳一(こやまよしかず)と申します。着任からほぼ2カ月となり、事務の方々や学科内の先生方のお名前と顔が少しずつですが一致してきました。一方、いろいろな場面で戸惑うことも多く、新しい発見!と感動しつつ新鮮な気持ちで臨んでいます。情報大のシステムに早く慣れ、皆さんに余りご迷惑をかけないようにと思っておりますので暫くはご容赦願います。

まずは自己紹介:札幌郡豊平町字定山溪(当時。実家は某鉱山系保養所。もちろん温泉付き)で生まれ育ち以後北大理学部化学科、大学院(北大免疫科学研究所)を修了、その後2年余の留学(カリフォルニア州ラホイヤ)と4年余の民間企業(東京高田馬場)を除き、この8月まで北大院医学研究科で研究・教育に従事しました。研究については、抗原と抗体の反応、抗体を用いたガンや免疫細胞の機能解析といった基礎免疫学を、北大に戻ってからはガン関連タンパク質や免疫関連分子の構造機能を生化学・分子生物学的に解析してきました。北大では本学科中林秀和先生と机を並べ、さらに西平順先生とは一緒に仕事をさせていただき、その結果今に繋がる研究に発展させることができました。教育では医学部生・院生の生化学実習や講義・演習のほか、高等教育機能開発総合センター(旧教養部)で生物学実習を担当、学外では苫小牧や稚内の看護専門学校で生化学の講義をしてきました。また、課外活動として自身OBですが体育会航空部(グライダー部)の顧問として学生と関わってきました(ここしばらく操縦桿は握っていません。学生時代は夕張川河川敷(江別東インターの近く)がホームグラウンドで『えべつ』の響きには特別な想いがあります)。

情報大では北大からの研究の継続と、教育に関しては次のように取り組むたいと思っています。学科目教育が大切なのは当たり前ですが、同時に学生の自主性を育み、結果的に学生が自らの発想

で課題を見つけこれを克服する能力をつけることも同じくらい、いやもしかするともっと大事なことはないかと感じています。要するに社会へ出たときのサバイバル能力、したたかさ、社会力(?)でしょうか。具体的にどうしたらよいのかはこれからの自身の課題です。試行錯誤を重ねるかもしれませんが、学生には専門知識とさらに自主性・社会性・協調性などを学び、魅力ある人間味あふれる社会人になれるよう努力を、また私自身も一緒に励みたいと思います。

学生さんたちにひとこと。期待に胸ふくらませ、あるいは、なかには不本意ながら第一志望ではなかった本学に入学してきたひと・・・様々かと思えます。君たちは今大学で何を学んでいますか。教科書をただひたすら記憶し、課題の多さに押しつぶされそうな毎日でしょうか。大学とはスペシャリストとしての知識のみならず、様々な価値観を持った人と出会い、独創性・創造性、さらには十分な素養と魅力ある、また誰からも尊敬されるような人間性をも学ぶ(全人教育)場である、と常々感じています。これは本学の理念にも高らかにうたっていることなんですね。このような4年間はもう後にも先にもありません(ふつうは)。大変貴重な4年間をいま君たちは過ごしているのです。学科の専門科目はもちろんですが、課外活動(部活だけではなく、趣味やアルバイト・ボランティアだったり)に積極的に取り組み、目をもっと広く世の中、世界へ向けてもらいたい。卒業時、あるいは社会へ出てから、もしかするともっと時間はかかるかもしれませんが、いつかあるとき「情報大へ来て良かった」と感じる事ができたいと思います。有意義な4年間を過ごせるか、の大部分は「今の」君たち自身にかかっています。私もお手伝いします。情報大に来て良かったと思いたいの私自身も同じであり、それは同じように私自身にかかっていると思っています。

キャリアガイダンス講座 第2回目 「社会人として自己を磨くために」

教養主任 加納 邦光

11月9日(金)午後4時15分から、製麺の「菊水」株式会社常務取締役である杉野邦彦氏による講演会が大講堂で開催された。

杉野氏は「社会人になる過程で大切なこと *近づくこと。*やってみること。*感じ取ること」と題して、お話になられ、「パワー・ポイント」や「動画」、更に息抜きとして「クイズ」なども折り込み、実に楽しく、分かりやすく、興味深く、若者のこれからの人生にとっての大切なことを語られた。

杉野氏の多彩な講演のすべてをここで紹介することは、紙面の都合で残念ながらできないが、その概要の一端をご紹介し、1年生のみならず、他の学生にとってもこれからの人生を考えていくための参考にしていきたい。

杉野氏は「菊水」の社是である「信頼と創造」から語り始める。会社を支える人財として「新しいことに挑戦する勇氣ある人財」、「創意工夫する人財」、「現状に満足せず自己を高めていく人財」、「強い実践力で会社に貢献する人財」を掲げる。次に7つの基本指針を示される。1. 顧客(お客様の立場に立つ)、2. 責任(成果への)、3. 信頼(約束を守る)、4. 本質(目を向けるべき)、5. 挑戦(困難への)、6. 反省(新たな決意を生む素直な)、7. 感謝の心である。

そして情報大の学生に、タイトルで示した「近



づくこと」として、事実がそのまま真実とは限らないとして、真実をつかむ力を身につけるための習慣づけの大切さを語る。「やってみること」では、「ズ(守)・バ(破)・リ(離)」として「ズ(基本を守る)」、「バ(基本を破る)」、「リ(基本を離れる)」を提示し、創造と独創に向かうことを語り継ぐ。そして「自由」と「わがまま勝手」の違いにも言及する。「感じ取ること」では、打ったら響く感度を研ぎ澄ませ、それが次の手を打つ力となる、そして力とは「能力」に「意志」を掛けたものであり、「力は力一杯やらないと力にはならない」ことを力説する。

次に北大前にあったラーメン店の「竹家」で、「ラーメン」の歴史を、それから母校や江別の地域への愛情を語っていく。江別の畑で育った小麦粉、「ハルユタカ」との結びつき、母校や地域との関わり、特に「ハルユタカ」との出会いにより、自社の麺が全国のトップブランドに育っていった様子を説得力をもって語られる。

氏の情熱溢れる語りに刺激されて、氏への質問に10人以上もの学生が手を挙げた。残念ながら時間が不足したが、講演が終わった後も、氏を10人ほどの学生が取り囲み、質問を続けた。

杉野氏に心から感謝申し上げて、本年度2回目の「キャリアガイダンス」の報告を終わらせていただく。



「キャリアデザインⅡ」で本学OB2人が講演

情報メディア学科 准教授 三浦 洋

昨年度から開講されている「キャリアデザイン」（前期「Ⅰ」、後期「Ⅱ」）は、成年を迎える2年生全員が自分の将来をしっかりと考え、定めた目標に向かって知識・能力・資質を高めていく必修科目です。今年度のカリキュラムは昨年の授業をバージョンアップした内容で、その一環として11月2日、松尾記念館講堂で本学OB2人が後輩たちを前に講演しました。講師をつとめたのは、ともに札幌に本社を置く情報系企業に勤務する西村誠さん（情報メディア学部を平成18年卒業、「テクノフェイス」勤務）と橋本伸弥さん（経営情報学部を平成13年卒業、「つうけんアドバンスシステムズ」勤務）です。

前半は仕事のやりがいや社会人生活について2人が講演、後半は担当教員・三浦の司会でQ&Aが行われました。その中で西村さんは、「一般教養を学べるのは大学時代だけだから、その機会を生かすべきだ」と力説、橋本さんは、「仕事では金銭に関わる案件が多いので、大学で会計のことを学んでおくといよい」と語りました。また、システム開発の仕事を進める上で、基本的な考え方は大学で学んだことが役立っていると口々に述べ、ゼミ選びや企業選びのポイントについても具体的にアドバイスしました。さらに質疑応答では、「IT職場は3K（きつい、汚い…）どころか9Kだというのは本当か？」という後輩の質問に対し、「自



分の場合、この道で行くしかない」と覚悟を決めた」と2人ともきっぱり。年齢の近い20代の先輩たちの講話に、出席者は熱心に聞き入りました。

昨年は映画「Always 三丁目の夕日」のCG制作に携わった佐々木嘉久さん（情報メディア学部を平成16年卒業、「プレミアムエージェンシー」勤務）に講演して頂きましたが、今年は講師依頼に関し斎藤一先生、棚橋先生にご協力頂きました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。担当教員一同（三浦、小西、非常勤講師4人）さらに充実した「キャリアデザイン」の授業づくりを進めて参りますので、今後とも各位のご協力をお願い致します。



江別市内にて

特別講演会を実施

経営情報学科 教授 玉山 和夫

去る10月30日、国際会計基準審議会理事の山田辰己先生をお迎えして、特別講演会を開催いたしました。



当日は本学講堂に320名もの聴衆が集まり、学外からも50名弱の参加者を数える盛況となりました。3年目になる今年は、「IASBの最近の動向—コンバージェンスの現状と展望—」と題して、日本が国際社会で果たすべき役割について、熱く語っていただきました。講演のなかで山田先生は、IASBがもはや国際会計の標準であり、ヨーロッパはもとよりアメリカでもこれを標準とする動きが加速されつつあることを強調されました。一方で、日本もこの動きに遅れをとることの無い様、切望

されました。

世界的な動向をかいつまんでご紹介すると以下のような状況です。

・EU内での動き

EU内ではすでに2005年から所謂IFRS(国際財務報告基準)が採用されている。

・アメリカの動き

アメリカ基準を放棄してでもIFRSに摺り寄せる準備があるとの発言も。

・オーストラリア・ニュージーランド

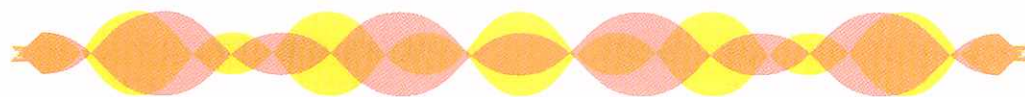
これらも2005年2007年に相次いで、IFRSを導入している。

カナダもIFRS採用日程を決めた。

・新興国

中国・ブラジル・インドなどの新興国もIFRS採用、または採用を決定している。

山田理事が日本もこの流れにスムーズに乗れるよう思いを熱くされている意味が良く分かる有意義な講演会でした。



札幌国際スキー場デザインコンペで川上ゼミ生が快挙

札幌国際スキー場開業30周年アニバーサリーマークデザインコンペティションにおいて、川上ゼミの提出作品が多数入賞しました。

このコンペは札幌国際スキー場を運営する株式会社札幌リゾート開発が上記スキー場の30周年を記念したマークを設定し、各種の印刷物、広告などに使用するためのマークのデザインを、一般から募集したものです。

川上ゼミでは各学生がデザインを制作し8点の作品で応募しました。

結果、相馬弘太郎君が優秀賞、藤岡秀美さんが

特別賞、このほか、平原祐樹君、瀧澤和樹君、時田和樹君の作品も入賞を果たしました。



Jゼミナール

経営情報学部 教授 穴田 有一

私たち教員有志は、今年度から学生との自主ゼミを始めました。自主ゼミというのは、正規のカリキュラムにはない、いわば勉強会のようなものですから、単位にはなりません。知識を吸収したい、資格を取りたい、技術を身に付けたいなど、純粋に意欲と好奇心と継続の意志が動機の学習の場です。これらの他になんの制約もありません。嫌なら辞めても構いません。自主ゼミは、また、学生と教員のコミュニケーションの場でもあります。私たちは、この自主ゼミを「Jゼミナール」と名づけました。「J」は、自主・自立・自律・自由・情報大の5つのJを表します。情報大の学生には、何事にも人を頼らず自主的に取り組んでほしいと思います。そして、ものごとの是非を自覚して行動できる社会の構成員としての学生であってほしいと思います。そのような学生にして始

めて自由という実に扱いにくい果実に触れることができるでしょう。正式名称は、「Jゼミナール」ですが、学生たちは自然に「Jゼミ」と呼ぶようになり、最近「Jゼミ」が正式名称のようになっています。

今年度前期は7名の教員と35名の学生が参加し、後期は9名の教員と34名の学生が参加しています。正規のカリキュラムにはないゼミなので、時間割にも載っていません。参加する学生と教員が互いの都合を話し合っ、ゼミの曜日と時間を決めます。残念なのは、ゼミ参加者に共通の時間を見つけるのが難しいことです。中には午後6時過ぎに実施しているゼミもあり、参加している教員や学生たちの意欲の強さを感じます。来年度は、もっと多くの教員と学生に参加してもらって、学習を通したふれあいの場を広げていきたいと思っています。



USB機器開発入門

| 教員名 | ゼミ名称 |
|-----|------------------|
| 梅津 | 独検チャレンジコース |
| 西平 | 医療ゼミ |
| 竹内 | TOEIC®対策講座 |
| 立花 | 『文学がもっと面白くなる』を読む |
| 森山 | 数学入門 |
| 広奥 | フリーウェア探求 |
| 五十嵐 | 現代社会のころを探る |
| 棚橋 | USB機器開発入門 |
| 穴田 | 恋愛とカオス |



TOEIC® 対策講座



情報処理北海道シンポジウム2007 技術研究賞および優秀ポスター賞受賞

平成19年9月19日(水)、情報処理学会北海道支部の情報シンポジウム(簡単に言えば、小規模の学会のようなもの)において長尾光悦准教授は技術研究賞、修士1年生の石井真人さんは優秀ポスター賞を受賞致しました。そこで石井さん(以下…石)と長尾准教授(以下…長)そしてその研究補助の須藤さん(以下…須)にインタビューを行いました。(インタビュア…イ)



所属: 経営情報学研究科 経営情報学専攻
趣味: 映画鑑賞、釣り
特技: ナビ操作
生年月日: 1991年10月
出身: 愛知県春日井市
マイアーム: 炭酸水
好きな言葉: 二燈の夜は酒が好き

石井真人

●焼き物のまち江別をPRする

Webサイトの設計

江別市には観光資源が埋もれてしまっているため、焼き物を通して江別市に人が来てもらうコンテンツとして焼き物に関するHPの設計をしている。焼き物に関する知識がなくても、見ただけで直感的に焼き物の違いが分かる、鑑賞できるようなシステムを開発中。



●受賞について

イ: 長尾先生の受賞した技術研究賞は、実用性の高い優れた技術研究が選考される賞ですが、受賞される自信はありましたか?
長: 狙ってたわけじゃないんだけどね。でも、受賞したときは「もうけた」って感じだった(笑)
イ: 石井さんはどうでした?
石: ポスター賞は意識していなかったんですけど、最低限見やすくはしようと安田先生のところに相談に行きました。正直、受賞するとは思ってなかったので自分が一番びっくりしていますよ。
イ: そういえば石井さんは、長尾先生に「このデザインじゃポスター賞なんて絶対無理」って言われてませんでした?
石: あっ! 言われてた!
イ: じゃあ、学会でポスター賞を受賞されたとき長尾先生もびっくりされたでしょう?
長: 何かの間違いだと思った(苦)

●研究するにあたって

イ: 研究していく中で、辛かったことはどんなところですか?
石: 焼き物に知識がない人でも楽しめるような仕掛けを考えるところかな。鑑賞するのは主観的なことだからさじ加減が難しく、直感的に楽しむためのいいアイデアがでないし、なかなかうまくまとまらなかった。
イ: 長尾先生は?
長: 風評被害について新聞やネットニュースを調べて、新聞の記事の面積を測り文字数をカウントしていくのだけど、まだ誰もやっていないことだから試行錯誤していかなきゃならなかったところかな。それで、どんな情報が出ているのかを分類していくのが大変だった。そのため記事の収集の分類を決めて分けていくのを、須藤くん達にやってもらってる。
イ: 須藤さんを補助に誘ったきっかけは何ですか?
長: 「あいつ、いけんじゃねーか?」って思ってスカウトした(笑)
イ: 須藤さんはそれを最初「やってくれないか?」って言われた時、どう思いましたか?

須: うちの大学でそういうことをやってるのって少なくって、コンピューターばかり使ってというのが多いから、情報の流布とか調べてみたら面白いかなって思った。
イ: やり始めて大変だったことはどんなところですか?
須: 新聞を5誌、毎日見ていかなきゃならないのが大変で…。まあ、毎日見ていっても空いてる時間に何日か分をまとめてやるんだけど、新聞を探しだして、記事の面積を測ってっていうのにとっても時間がかかった。
イ: 結構、量はあるんでしょう?
須: 最初の1週間の量は本当にすごかった。作業が多くて全然進まなかった。
イ: でも、いきなりスカウトされたのに賞をとるなんて苦労された甲斐がありましたね。
須: いやあー、よくある話です(笑)

●情報処理シンポジウムについて

イ: 須藤さんは今回、初学会ですよね?行く前と行った後でイメージと違った事とかありましたか?
須: やっぱ一番違ったのは、大きい講堂で1人ずつ発表していくのになって思ったけど、ギャラリーのようにポスターを貼って、別々に発表していく感じだったのが一番違った。
長: 情報処理シンポジウムは去年からそういう形式に変えた。元々は発表形式でやってたんだけど、盛り上がりなくて去年からこの形にした。
石: 一昨年、情報大学でやった時は発表形式でしたよね。
イ: じゃあ、一昨年はポスター賞とかなかったのですか?
石: 一切なくて、ポスター賞も去年からなんだよ。
イ: ポスター形式でのメリットはなんですか?
須: 実際、聞きたい研究展示をチョイスして聞けるから楽なんじゃないかなっていうのはありますね。
長: でも発表者は大変かも…
須: 人來たら毎回説明しなくちゃならないからね。
長: それを90分間ね。あと、一番辛いのは「自分人気ない(泣)」って思うことがある瞬間だね。

長尾光悦 准教授

所属: 医療情報学科
趣味: ゴルフ
特技: 掃除・整理整頓
生年月日: 2月6日
出身: 北海道札幌市
マイブーム: 高級ホテル宿泊めぐり
好きな言葉: 愛

●観光地における風評被害対策に向けたメディア情報の分析

風評被害とは事件や事故が起きた際に、憶測や根拠のないうわさ等の影響を受けて被害を受けること。1996年に貝割れ大根がO-157の原因であるという報道がなされ、貝割れ大根農家が大打撃を受けるということがあった。このような風評被害が起きないように正確な情報を流すシステムとネットニュースを連動させるシステム開発をする。現在は何が原因で起こるかを調査し、どのような情報がでているかを分類する基礎研究を行っている。このシステムで情報提供をすれば、風評被害を抑制、防止できるようになる。



須藤一弘

所属: 情報メディア学科
趣味: DVD鑑賞
特技: 数学
生年月日: 10月9日
出身: 青森県むつ市
マイブーム: 相簿
好きな言葉: ユウ

●最後に

イ: 最後にメッセージは?

石: 僕のゼミの斉藤一先生が、この前、お子さんが生まれたということなので、優秀ポスター賞を斎藤先生のお子さんに奉げます(笑)

長: なるべく、学生にもこういう場に出てほしいなって思います。学会は大学生としていい経験になるし、食べ物おいしかったりもするしね(笑) 出来れば学部生のうちから、他大学生と情報交換してほしい。先生が「出る」って言うのでは無く、自主的に出てみたいと言える感じになるといいな。言われるまで待ってるんじゃなくて、積極的に自分から言い出す大学生になってほしいです。

イ: 須藤さんは?

須: 特にありません(笑)

長: せっかく僕がいろいろ言ったのに…(´ω´)

(一同笑い)

以上

インタビュー 高橋美波

●情報メディア学科4年

今回お話しいただいた長尾先生、須藤さん、石井さんの3人とは普段から接点があることもあり、とても楽しく取材させていただきました。私は学会未経験者ですが3人の話を聞いていると、これまで思い描いていた学会のイメージとは違う楽しそうな雰囲気伝わってきて、私も卒業間近なのに学会で発表してみたくまりました。この記事を読んだ皆さんが、これから学会をはじめとするいろんな経験をしてみたいと思ってくれたら良いな、と思っています。

写真制作: 池田マコ(河津洋行 黒田)
文章編集: 池田マコ(河津洋行 黒田) 写真編集: 池田マコ(河津洋行 黒田)
記事構成: 池田マコ(河津洋行 黒田) 取材: 池田マコ(河津洋行 黒田)



(一同笑い)

イ: どれくらいの学校が出ていたんですか?

長: うーん…北海道情報大学、北海道大学、北海道工業大学、ほこだて未来大学、北見工業大学とかが出ていて、研究件数44件のうち、11件は情報大学だったよ。

イ: 展示ブースは広がったんですか?

長: 広いって言うか、北海道工業大学の廊下だよ。

須: 狭い狭い(笑)

長: ほこだて未来大学なんかでやった時は、広いギャラリーがあるから結構余裕を持って出来たんだけど、道工大の廊下はちょっとギチギチ感があった。でも道工大のキャンパスは広いし、学生サービスはいい大学だよ。(←道工大のOB)

イ: こういう機会があれば、他の大学を体感できたりしますもんね。

●懇親会について

イ: 日程の中に懇親会があったみたいですけど、どんな感じだったんですか?

長: 道工大の学食で立食パーティーみたいな感じでした。料理も沢山出て、おいしかったですよ。

イ: お酒とかは出たんですか??

須: ビールが出てたね。

石: でも僕くらいしか飲んでなかったよね。

イ: じゃあ、他のみなさんは飲めない分食べてきたんですか?

長: 死ぬほど食べた(笑)

須: ほかの学校には負けてなかったね。

イ: 一人フードファイトしてた奴いたし(←この人)

長: 情報大のテーブルだけ、凄まじい皿の数だったよ(笑)

(一同笑い)

イ: 道工大がアウェイに感じるくらい食べてたね。

須: 完全に僕らのホームだったよね(笑)

平成19年度 ふるさと江別塾実施

平成19年10月27日(土)、江別市主催、江別市教育委員会と市内4大学共同企画による「ふるさと江別塾」が本学で行われました。今年の総合テーマは「江別学を目指して」。各大学が地域に根ざした講義を繰り広げます。本学の講義タイトルは「地域医療を考える ―江別地区をモデルとして―」で、講師は、経営情報学部 医療情報学科 教授の西平 順 先生等が担当しました。参加者は60名程度で、「ふるさと江別塾塾生の会」の皆様が受付などを担当して下さいました。

内容は、予防医学を中心とした地域医療のあり方や、新しい医療制度の講義などの後、遠隔診療に関する説明とデモが行われました。デモでは、専用の機器を設置し、心電図を離れた医師にイン

ターネット回線で送り、インターネットカメラを利用して、リアルタイムでフェイストゥフェイスの診断を仰ぐことなどが行われ、参加者は皆、とても興味を持ったようでした。昨今、医師不足などが話題になることが多い中、すでに様々なシーンで実用化されている遠隔診療がこれからますます広がっていくことに、大きな希望を見いだした参加者も少なくなかったのではないのでしょうか。

ふるさと江別塾は今年も、江別市内4大学の持ち回りで行われました。生涯学習に非常に熱心な市民が多い江別市ならではの企画として、市民と手を携え、今後ますます充実を図りたいと思います。(総務課)



🌐 学生相談室は身近な相談相手です 🌐

皆さんのきょうだいや両親、友達や先輩が悩みごとの相談に乗ってくれるでしょう。それでも解決しないとき・・・

臨床心理士と教職員が、学生生活のさまざまな悩みを一緒に考え、あなたをサポートします。

たとえばこんな悩み・・・

- ◆眠れない、何もやる気がしない。
- ◆友達が作れない。
- ◆勉強のことで困っている。

相談した内容については秘密を守ります。

🌐 学生相談室の利用方法 🌐

- ◆相談希望者は直接学生相談室あるいは相談担当者を訪ねてください。
- ◆相談を継続する場合、2回目以降は時間を予約して頂くことがあります。
- ◆相談室前に置いてある「予約カード」で相談の予約ができます。
- ◆相談室の利用時間は
<http://www.do-johodai.ac.jp/campus/soudan.html>
で確認できます。

🌐 学生相談室への問い合わせ 🌐

- ◆学生サポートセンター
TEL (011)385-4416
こちらの電話では、具体的な相談には応じられません。

えべつものづくりフェスタ2007に出展

平成19年9月22日(土)に「えべつものづくりフェスタ2007」が開催されました。江別市のほくでん総合研究所を会場に、今年で8回目を数えます。今年も、開場前から行列のできる人気は相変わらずで、さわやかな秋晴れの中、1,500人ほどの人が来場しました。

本学は毎年、デジタルカメラで来場者の顔写真を撮って、それを何かにプリントするという内容で出展しています。今年は顔写真でカンバッチを作成することにしました。できあがり直径54mmのカンバッチですが、フレームは各種選ぶことができます。今年の人気フレームは、水槽でお魚と一緒にという図柄のものでした。また、今年のおもしろフレームは牢屋の鉄格子の向こうから顔を出し



入り口の様子

上空まで上がります。炎を吹き上げ、音を立てて、大空めがけ上昇するロケットはなかなかの迫力です。今回は10組限定のため抽選となりました。40組ほどの方が応募してくださいましたので、倍率は約4倍。高い倍率をくぐり抜け、モデルロケットを打ち上げる感激もひとしおだったことでしょう。対象はお子様でしたが、付き添いのお父さん、お母さんも結構、熱がはいついて、楽しんでいただいていたようです。

この「ものづくりフェスタ」は今年も大変盛況でした。江別市内4大学のみならず、市内の企業や市役所など、毎年趣向を凝らした出展を展開し、ますます盛り上がりを見せています。今後も、地元にも更に定着するイベントとなるよう、努力していきたいと思えます。

(総務課)



モデルロケット発射

モデルロケット作成中



ているように見えるものや停車禁止のデザインを模したものなど、一部の方には大変支持を得ていたようです。本学会場にはリピーターの方も多く来てくださり、子供の成長記録のひとつとして毎年欠かさずご来場下さる方もいます。スタッフも年々成長するお子様を目の当たりにして、驚くやら、うれしいやらの一日を過ごしました。

今年の本学の出展はもうひとつありました。モデルロケットです。ペットボトルのロケットではありません。プラスチックの組立キッドがあり、それでロケットを作り、さらにシールなどを貼って自分のロケットに仕上げます。完成後は実際に火薬を詰めて、広い場所で発射台から打ち上げるというものです。条件によりますが、80mくらい

★SMAT2007★ 私たちの提案「ゴミ育!!」

部門優秀賞 受賞



私たち、
情報大学ゴミイ
プロジェクトチームは
去る9月1日から2日にかけて
行われた「Sapporo Media
Art Trial 2007」に参加し
「コト」部門で部門優秀賞を
受賞することが
できました。

Sapporo Media Art Trial 2007とは?

市民がゴミを正しく分別して捨てられるようになるための提案を行う学生コンペティションのことです。
「コト」・「モノ」部門の二部門に分かれていて、学校ごとのブースで展示とプレゼンテーションを行いました。



そのゴミ、どこイク？
ロゴマークを作ってみました↑



ゴミイクができるまで



材料

- ・ボード A0 (3枚)
- ・A1 (4枚)
- ・画用紙 (1セット)
- ・磁石 (1枚)
- ・カッター (数本)
- ・両面テープ (2個)
- ・はさみ (数本)

- ・みんなの愛情 (適量)
- ・カッター板 (数枚)
- ・定規 (大量)



作業工程

1. 8/20 話し合いを始める。
2. 8/21 作業開始
3. 何日も考え、愛情を注いでいます。
4. 出来上がってきたら、印刷あるのみ!
5. 印刷をして、悩む。
6. イメージと違い、煮詰まる…。
7. 8/30 ぞして! 悩みに悩んでようやく完成♪
8. 8/31 会場に展示
9. 9/1~9/2 本番

※作業ゲンバの様子は下記をご覧ください



実際の作業ゲンバ模様!!!

顔合わせの時はなかなか、緊張しました。顔はみんなお互い見たことあるものの、喋った事は全くないし、作業期間は一月もない。その状態で仕事を始めるのは不安が募るばかりでした。でも、いざ話してみたら、ほぼ同じ学年ということもあり、すぐに仲良くなりました。みんなで朝から東急ハンズに買い物の下見に行き、その後は、「青春だー!!」と叫びながらみんなで草むらを取り回ったり、オールナイト遊んだり…とみんなで楽しみながら制作しました。
※先生にはいつもおごってもらっちゃったり…(笑) 感謝♪



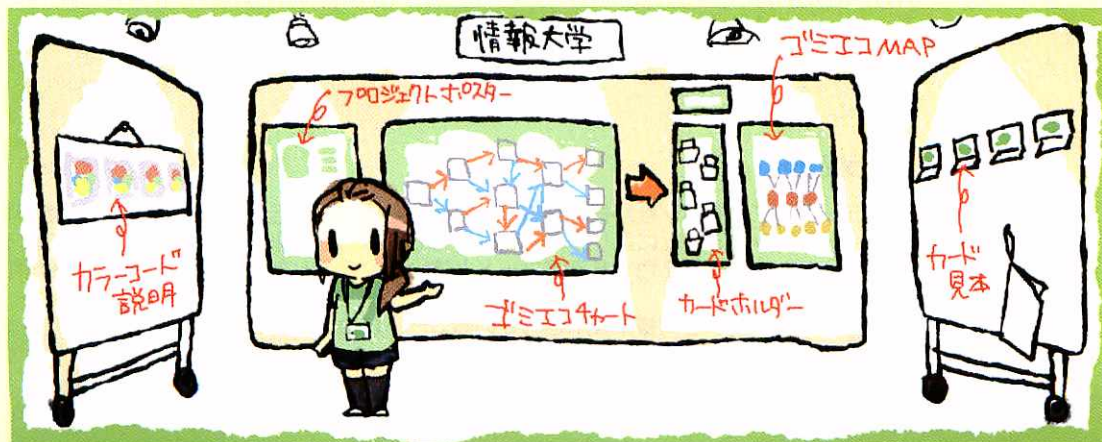
みんな仲良くなり、少しずつ仕事も動き始めたころ…先生からの衝撃の一言「実習室の使える日数が少ない。」イラストレータが入っている実習室は限られているし、使用時間も決められていて、作業時間がないということを知られました。みんなに一気に危機感が走りました。みんな「仕事モード入ります!」しかし、焦れば焦るほど、うまくいかないもので、8時、9時まで残ってやっても全く終わらず。また、保存したはずのデータが消えてしまうなどどてんやわんや。そして…1君の带状疱疹…指示もなかなかうまく行かずどんどん締切は迫ってきました! 果たして完成するのか?



どんどん本番に近づいてきました。でも終わりません。色んな方々のおかげで実習室を遅い時間まで使わせて頂き、部屋は一面ゴミイクの職場と化しました。そして、最後の二日間は終電がなくなりそうになるまで頑張りました。最後の仕上げ。みんな悪戦苦闘。しかも、完成したものに間違いがあったりで、ボーン…せっかく作ったカードもうまく裁断できず、当日まで苦労しました。ですが、直前にどんどん出来上がっていき、作品が具体化してきたら、みんなの気持ちがHAPPYになりました♪そして、前日に会場まで作品を運び、貼り付けの確認や、色々手直しをしようやく完成!! みんな拍手喝采!! みんなでここまでやってよかったと思えた瞬間でした。

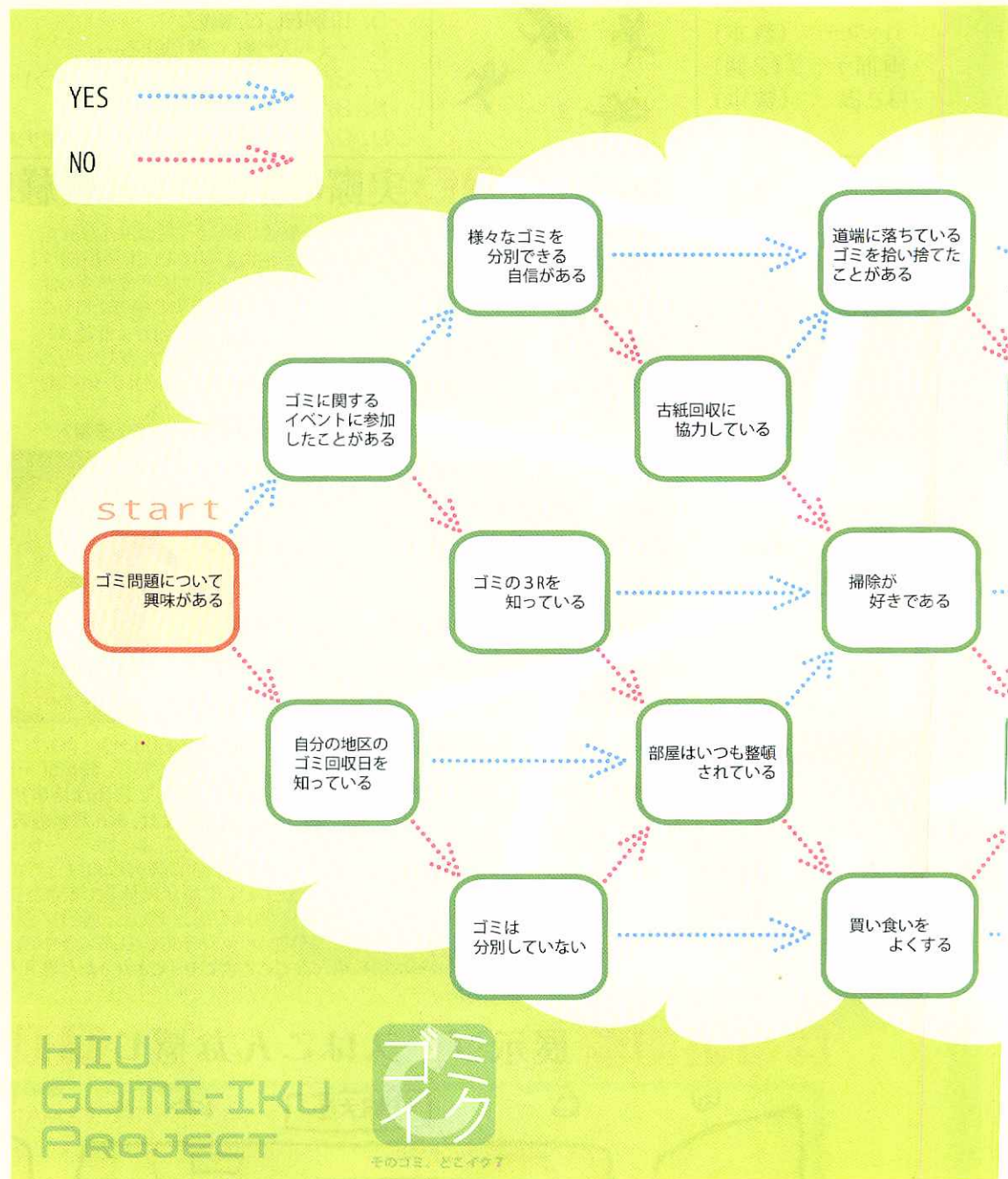


展示ブースはこんな感じ



ゴミエコチャート

～あなたのゴミエコタイプは？～



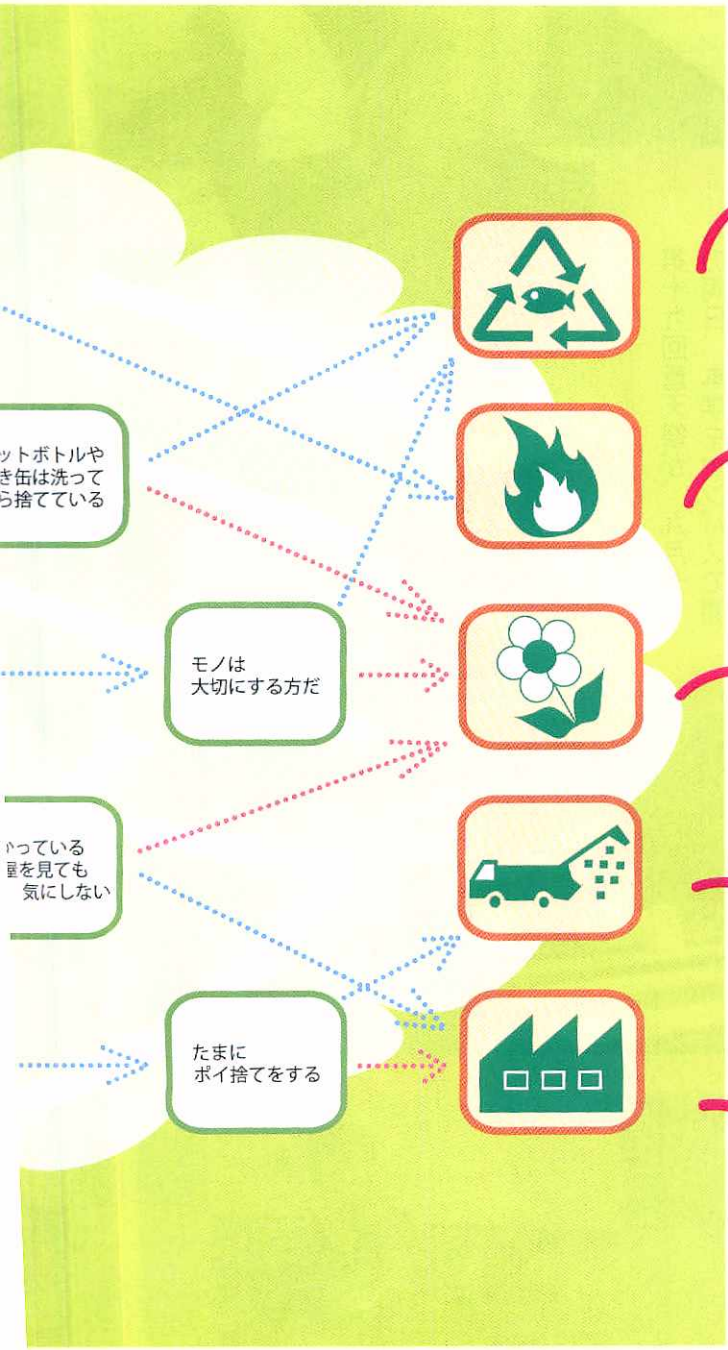
カラーコードって何！？

カラーコードとはカラージップジャパン社が提供する、QRコードと同じ二次元コードの一種です。携帯電話や、PDA及びPC等のカメラでコードを読み取ることにより、コードに対応した情報を端末に表示させることができます。

QRコードとの大きな違いとして、白黒2色であるQRコードと違い、文字通り他の色（黒、赤、青、緑や白黒グレー）を使うことができます。

カラーコードの認識方法はQRコードと同様に表示されているコードにカメラをかざすことで、認識できますが、専用のアプリケーション（カラーコード・リーダー）が必要となります。

ゴミエコチャートとは、見る人のゴミに対する関心、知識を調べ、その結果により今後どのような活動をするべきかを導くものです。診断結果に応じたカラーコードで携帯サイトを見て、ゴミに対する理解を深めてもらいたいです。



カラーコード・リーダーのダウンロード方法

一タイから <http://czip.jp> にアクセスし、ダウンロード(無料)してね!!



カラージップ社への
カラーコードとQRコード



読み取る

2007年
第19回

蒼

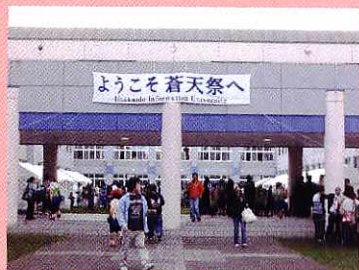


第十九回蒼天祭が、九月七八の両日、本学キャンパスで開催され、本学学生をはじめ、近隣住民の方々も多数訪れ、にぎわいを見せました。



堀内沙織さんのミニライブ

天祭



大学祭を終えて

大学祭実行委員会 実行委員長 3年 三上 真平

まず、第19回大学祭「蒼天祭」が事故も無く、無事終了する事が出来ました。これもひとえに、ご協力して頂いた大学関係者、協賛して頂いた企業様をはじめ、様々な方々にご協力して頂いたおかげであります。この場をお借りして、心よりのお礼を申し上げます。

さて、今年度の大学祭は両日ともに天候に恵まれ、大学祭の名前である「蒼天祭」の名に相応しい大学祭となりました。そんな天候に恵まれたおかげか、例年にも増した1,800人を越えるお客様にご来場頂き、楽しんで頂けたと思います。

私は今回の大学祭では、委員長という組織の統括のポジションで臨んだ大学祭でした。右も左も分からぬような状態で、大学関係者の方々に助言と助力をして頂き、また実行委員会の仲間達に支えられ、当日なんとか成功という形で終了致しました。

準備期間から数え、約半年。昨年までとは違う立場、違う位置で実行委員の仲間や、大学関係者の方々、外部企業の方々と顔を合わせ、お話をさせて頂きました。私自身、全く未知の領域での対応が多くはありましたが、支えてくれる仲間や大学関係者の方々のおかげで、委員長としての仕事を全うできたと思います。

思えば、この半年は全くと言っていい程の新しい事の連続でした。漠然と捉えていた社会人の方々とのお

話は一つ一つが身に沁みて、大学関係者の方々からは温かいお声と支援が身に沁みて、昨年までの自分が如何に周囲への視野が狭かったかを痛感致しました。ですが、今年の委員長としての体験が、私という個人を。また、実行委員会の会員全てに、社会に出るまでのこれからと、社会に出てからのこれらに対して、何らかの勉強になったと感じております。

実行委員という組織で3年間行ってきた経験から、人と人との繋がりを感じ、またその繋がりにも様々な形が存在し、それが幾重にも折り重なり「社会」という場、或いは「組織」という場が形成されるのだと、若輩者ながら感じました。そして、それが私という個人に大きな影響を与えたと感じております。

これから、実行委員会は来年度に向けて動き出していく中で、私は後輩にもこういった大きな物を感じ取って欲しいと思います。例え、それを行っている時が苦しく辛い状況だとしても、それが自分の糧となっていくと言葉ではなく、体験で知ってもらいたいと思うからです。

最後になりますが、今年度実行委員会の活動にご協力して頂いた皆様、誠にありがとうございました。また、来年度以降の実行委員会の活動に、ご理解とご協力頂けるようよろしくお願い致します。

「海外事情」引率の感想

情報メディア学科 教授 高野 俊夫

2004年について、今回は8月18日に単独で成田を出発。UA機が3時間遅れたため、サンフランシスコ発のグレイハウンド・バスは、午後7時発の最終便しかなく、その日のうちにサンタクルーズに着くのがやっとでした。

空港での出入国管理官の前での写真撮影・指紋押捺に加え、バスの待合所での拳銃を携帯した警備員による切符確認と、9・11の影響の深刻さが窺われました。この国の長所である開放性が失われていくのは寂しい限りです。

現地では、ELIに張り付きだったため、ヨセミテ国立公園だけが、唯一の遠出でした。今回は、滝壺巡りの他にメタセコイアの巨木を見たり、星が瞬くハーブドームの夜景を楽しんだりすることができました。真っ暗闇の中、家族連れも多く、アメリカ人の風流心に触れた気もしました。

さて、街の様子はといえば、以前とほとんど変わっていませんでしたが、書店では、ハローキティのカレンダーや宮崎アニメのDVDを見つけ、スーパーでは、米国製のカップラーメンを発見したりと、まさに文化のボーダレス化は一層進んでいるようでした。もともとの文化にヒスパニック系はもちろん、日中韓、それにインドやタイなどのアジア系の文化までもが重層化しており、多民族

で構成されたカリフォルニアの土地柄が強く感じられました。

前回同様、学生の教育活動にはほとんど介入せず、学生が自主的に皮膚感覚で英語を学んでくれることを願いつつ、裏方に徹する毎日でした。風邪や腹痛の学生を診察(?)したり、英語の手紙の書き方を教えたり、代筆したりしました。

今年プログラムは大盛況で、日本から東京理科大など5校が参加、他大学の学生とも交流できたのが収穫でした。中韓、ヨーロッパ、アフリカからも多数の参加者がいました。中学以来学んできた英語が、授業やホームステイ、街の人々との交流で実際にコミュニケーションの手段として役立つ場面にきっと遭遇したことと思います。

今回私たちのお世話をしてくれたのは、今年6月にUCSCを卒業したばかりのケイトリンという元気なアメリカ女性とヨセミテに案内してくれたハイジという女性でした。ケイトリンの「イエイ!」のかけ声とともに全員で右腕を突き上げる威勢のよさは、女王と11人の騎士といった趣でした。

この愉快的旅で得られた体験が、これからの人生に必ず生きてくるものと信じています。終わりに、この旅を成功に導いていただいた関係者の皆さんに心よりお礼を述べたいと思います。

海外事情を経験して

システム情報学科 3年 折笠 裕平

はじめに、海外事情は私にとって忘れられない思い出となりました。一緒に行った友達、先生方、現地の人達、ホームステイ先の家族に感謝したいと思います。私が行ったカリフォルニア州サンタクルーズという街は、気候がとってもいい街で気温が20度くらい、湿気も全然無いというどこか札幌と似ているような街でサーフィンや、スケートが盛んな街でもあります。アメリカに行く前は、英語力全然無いのに、アメリカへ行って通用するか不安でいっぱいでしたが、アメリカの空気に触れそれも少しずつなくなっていきました。サンタク

ルーズに着いてからは寮生活が5日間、それからホームステイという形だったのですが、寮生活では友達とビリーズブートキャンプしたり、トランプしたりと色々楽しみました。ホームステイ先ではフリーマーケットに連れていってもらったり、スケートパークに連れていってもらったりと楽しいことがいっぱいでした。滞在先の大学では英語で文法や、会話、特別授業などがあり難しかったけれど、現地の言葉に触れていい機会になったと思います。また機会があれば今度は一人で行ってみたいと思いました。

「海外事情」(中国)の引率をして

システム情報学科 教授 玉置 重俊

本年度は、南京大学における本学の中国語研修が、はやいもので第八回目を迎えた。今回の研修では、前半の期間は田中先生が引率と監督を担当し、私は後半から、学生たちの面倒を見ることとなった。私は8月17日に、関西空港から単独で上海に到着した。例年だと、私は必ず十数名の参加学生たちを引率して、少し緊張しかつ心配しながら、中国で入国手続きなどをしていただが、今年は、そのような精神的な負担はないかわりに、何か大きな忘れ物をしたかのように感じられた。18日の夕方、汽車で南京に到着して、早速田中先生とも色々話し合い、入国後の学生たちの情報ももらって、何とか引継ぎの仕事を終えることができた。

14名の学生たちは、すでに南京大学で10日間の研修を経験しており、後半のプログラムに取り組んでいた。私は中国語の教室で、はじめて全員の顔を見たが、みんなとても元気に、異国での生活をこなしていて、本当に嬉しかった。南京大学のお二人の先生も、情報大学の学生は、非常にまじめで成績もすこぶる良いと称賛して下さった。私は毎日、学生たちの名前と性格を覚えるために、20分ほど授業を見学したが、全員がたいした病気にも罹らず、熱心に中国語を勉強しており、とても頼もしく感じた。

最後の研修旅行でも、概ね全員が私の指示をきちんと守り、安全で有意義な旅行を続けてくれた。



北京では、若い女性のガイドさんが、バスの中で、優しい日本語をたくさん話して下さったので、学生たちも安心して、有名な観光スポットを遊覧することができた。故宮、天安門広場、頤和園、天壇公園そして万里の長城などを、心行くまで堪能し、きっと最高の思い出が残ったことであろう。確かに、異文化理解は決して簡単なものではないが、今回の「海外事情」という研修で、14名の学生が見た生の中国は、彼らの将来に大きな指針と影響をもたらすはずである。とにかく、全員がたくさん収穫を携えて、無事に帰国できたので、引率教員としてはこれ以上の喜びはないが、この研修にご協力くださった関係各位と神様に深く感謝を申し上げたいと思う。



太極拳授業参観記

—初めての引率を終えて—

情報メディア学科 教授 田中 英夫

2007年度「海外事情(中国編)」は本学経営情報学部からは2名、情報メディア学部からは1名、通信教育部からは11名の学生がそれぞれ応募し、私も引率教員を命ぜられて、8月4日(土)から9月3日(月)までの約1カ月間行われた。第8回中国語夏季短期留学プロジェクトとして、南京大学海外教育学院で実施され、所期の目的を達成して、研修学生全員が無事帰国することができた。

夏季短期留学日程前半(8月4日～8月19日)は私が学生の引率を担当し、後半は玉置先生が引率を担当した。本学に着任して以来、教員として学生引率を担当するのは初めての経験だった。

前半引率はあつという間だったが、様々な経験ができた。紙幅の関係で、引率者から見た太極拳授業参観の感想を述べるにとどめたいと思う。

研修学生の南京大学でのこれまでの短期留学生活は、午前が中国語の授業で、午後は自由時間というものだった。今年からは毎週水曜日の午後4時から6時まで、太極拳の授業を新しい科目として設けられた。

太極拳というと「お年寄りの健康体操」というイメージを持たれる方も多いが、実は中国の若者の間でもとても人気があり、健康法として高く評価されている。

太極拳授業担当の楊新華先生は最初の授業で、東洋医学の思想では、人間の体の中には「気」という重要なエネルギーの流れがあり、この流れが滞ることによって、体調が崩れると考えられている。ゆったりとした動きと独特の呼吸法を用いる太極拳は、この気の流れを潤滑にし、体調を良好な状態に保つための運動法で、中国では古くから多くの人々に広く親しまれてきたというお話をされた。

楊先生は伝統的な「二十四式太極拳」を簡略化された「八式太極拳」(速成太極拳)を研修学生に教えて下さった。私は楊先生から事前にもらった「八式太極拳(中国語版・英語版)」の説明書をコピーして研修学生全員に配布した。

なお、「八式太極拳」(中国語版・英語版)の内容(日本語訳付き)は以下の通りである。



起勢(Commencing Form)⇒始めの姿勢

1. 卷肱式(Repulse Monkey)⇒腕を逆さに巻く姿勢
2. 搦膝拗歩(Brush Knee and Twist Step)⇒膝を払って進む姿勢
3. 野馬分鬃(Parting the Wild Horse's Mane)⇒野の馬のたてがみを分ける姿勢
4. 云手(Cloud Hands)⇒雲のように手を動かす姿勢
5. 金鸡独立(Golden Rooster Stands on One Leg)⇒一本足で立ち上がる姿勢
6. 蹬脚(Kick with Heel)⇒蹴って足を踏み出す姿勢
7. 揽雀尾(Grasp the Bird's Tail)⇒孔雀の尾の形を作って防ぐ姿勢
8. 十字手(Cross Hands)⇒手を十字に組む姿勢

收勢(Ending Form)⇒終わりの姿勢

研修学生たちは、本場中国で太極拳を体験し、有意義な授業を受けることができたので、非常に良かったと大満足していたらしい。楊先生の丁寧な指導のもとで、研修学生たちが生き生きと太極拳を楽しむ姿をいまなおありありと私の心に浮かべることができる。もし、次年度も引率教員を命ぜられたら、研修学生たちと一緒に太極拳を楽しみたい。来年の夏が待ち遠しい。

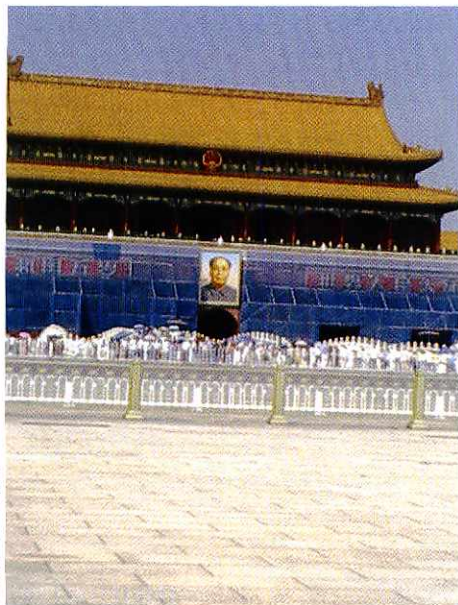
引率の経験も教訓もない私に色々な場面でサポートをして下さったのは、第一回から第七回までの引率を担当された玉置先生、14名の頼りになる学生、南京大学海外教育学院側引率担当の王美紅先生と阮艶先生であった。今回の夏季短期留学を大成功に導いて下さった関係者の皆様にあらためて心より御礼を申し上げる次第です。

中国で体験したこと

経営ネットワーク学科 2年 高山奈穂美

今回の語学研修で私は初めて海外に行きました。1年生の時に中国語は履修していましたが、私の中国語が現地の人に通じるとは思っていませんでした。必ず日常会話に困るだろうと感じていました。しかし自分の知らない国とはどういう場所なのか、という好奇心が強かったので今回の語学研修の参加を決めました。

まず研修を行う前に上海、蘇州を訪れました。上海の夜、黄浦江遊覧船に乗ることができたのはとても嬉しかったです。黄浦江西側の外灘の夜景と、黄浦江东側の「東方明珠塔」、「金茂大廈」の



北京・天安門

美しい夜景が同時に見られるのは最高の贅沢でした。これは、乗って体験した方が良いと思います。

語学研修は南京大学で行われ、3

週間の間2人の先生が発音から日常会話まで丁寧に教えてくれました。日本語を話せる先生が1人いましたが、基本は中国語です。初めの授業は「この単語の意味がわかるかい？」と中国語で聞かれても、聞かれたことすら理解できない状態でした。それでも先生は根気よく教えてくれたので、研修の終盤にはある程度の日常会話ができるようになりました。

視察研修には北京に行き、天安門広場、万里の長城などを訪れました。天安門広場では様々な建物を見ることができました。万里の長城では、急な段差を1時間以上も歩き、太ももが悲鳴を上げてしまいましたが、それでも我慢して歩き続け

てやっと頂上に着きました。その時の喜びと達成感は、今まで体験したことが無い感覚でした。

中国にいた1カ月間は、とても生活が充実

していて、楽しい日々を送ることができました。中国に行かなければ、経験することができないことも多くありました。これも受け入れてくれた南京大学、引率していただいた先生方、また、海外事情を助めてくれた先輩方、海外事情を提供していただいた情報大学のお陰だと思っています。そして海外事情の費用を負担してくれた家族にもとても感謝しています。



万里長城



上海の夜景

短期留学っておもしろい

情報メディア学科 3年 大内 千法

知っていた？ 中国にはババ抜きが無いってこと。知っていた？ 中国には自動販売機がほとんど無いってこと。僕はそんなこと全然知らなかった。違う習慣、違う環境、違う文化。その中で1カ月間を過ごすことができたことは、とてもいい経験になったと思う。お茶に砂糖が入っていたこと、地面に膝をついてお金を恵んでもらっているお年寄りを見たこと、本屋に漫画が置いていないこと、他にも日本では考えられないようなことがたくさんあった。そんな光景を見て、いろいろなことを思ったし、いろいろなことを考えさせられた。また、中国での生活を通して改めて感じる日本の良さ、そして同時に日本とは違う様々なことに対する驚きと、おもしろさを知ることができたのもよかったと思う。

ただ残念なのは、今回中国への短期留学に14名が参加したけど、学内からの参加者は、たったの

3名だったこと。中国語を履修してないから中国留学を諦めている人や、中国語が全然わからないから留学に踏み切れない人がいるかもしれない。でも、行きたいと思っているのならぜひ行くべきだと思う。1年勉強したくらいで話せるようになる人なんてそうはいない。僕も話せない。もちろん今回行った人のほとんどが中国語を話せない。それでも、身振り手振りで意外と通じる。話せないからって諦める必要なんて全然ない。

夏休みに、アルバイトを頑張るのもいいと思うし、趣味に時間を使うのもいいと思う。きっとそれも、社会人になっただけできないことだから。でも、短期留学ができるチャンスもそうそうあるものではない。もしかしたら、この先、一生ないかもしれない。そう考えたら、大学4年間の内に一度くらい留学をして夏休みを過ごすのもアリだと思わない？



サハリンでの出会いと体験

情報メディア学科 4年 倉持 太和

今回、私が参加した〈第9回青少年サハリン「体験・友情」の船〉では多くの日露の関係者と出会い、感動的な触れ合いの中でたくさんのことを経験し、学ぶことができました。それは言葉では言い表せないほど、とてもすばらしいものでした。参加しようと思ったきっかけは、道新の記事に掲載された「大学生リーダー募集」でした。それを見て、これまでに力を注いで頑張ってきた経験やそこで得たものを活かせるような気がしたのです。大学2年生の時に授業の一環で海外事情(アメリカ)に参加し、今年の5月から3週間の教育実習(教職

課程)を積み、課外活動では現在も行っている二つのボランティア活動(一つ目は高校時代の部活の関係でOBとして毎年行われる『青少年ための科学の祭典』の実験デモストレータとして参加、二つ目は日独平和フォーラム北海道という福祉団体の事業関係でイベントスタッフの仕事)を行って来ました。また、部活やゼミのリーダー経験があったことも幸いして、この募集の選考に受かることができました。この事業の一般参加者の多くは小学生から大学生までの人たちでしたが、私の班は小学生と中学生が大半で、私はリーダーとし



中央、鉢巻き姿が筆者

て良い班作りができるようにイメージトレーニングを心がけました。

海外に行くのは今回が二度目でしたが、もともとサハリンとその文化や歴史には関心があったので、出発の日が待ち遠しくて仕方ありませんでした。その反面、上手く現地の人たちと交流ができるのか、という多少の不安もありました。

実際にサハリンに行って経験してみるとリーダーとしての大変さ、言葉の壁、生活様式・文化の違いなどを思い知らされ、苦勞したことが多々ありました。

日程の変更や連絡を迅速に判断し班員に何が重要かわかりやすく伝えること、班員の怪我や病気に適切に対応すること、特に大切なのは年齢がばらばらな中で私自身や班員がどうコミュニケーションを取り合い、班をまとめて行くかということでしたが、そここのところは他のリーダーの力も借りて参考にしました。また、リーダー会議などで班から外れた時は、班員の中で比較的年長の17歳の社会人の子と上手く連携を取り合い、班をまとめさせるようにしました。サハリン生活最後になってようやく班らしくなり、本当に良い班を作ることができました。

現地の人との交流では、日本語の通訳者と上手く連携を図り、言葉の壁を気にせずに話すことができました。ホームステイの経験は今回が二度目でしたが、英語ならまだしも、勉強したことないロシア語でコミュニケーションすることはさすがに大変で、ボディランゲージだけでは限界があり、最初はとても苦勞しました。しかし英語が少し使えましたし、お礼の言葉をロシア語でちょっと話すだけで気持が通じて、本当に楽しく過ごせました。現地の人たちとの接触は割と少なかったですが、色々な国の人と話をし勉強できることは素晴らしいことだと感じました。

人々の生活をみて不思議に思ったことは、サハリンでは貧富の格差が非常に大きいということでした。お湯が工場からくみ上げられていたことにも驚かされましたが、そのお湯が配管が錆びついていたために茶色く濁っていたので、最初のうちはシャワーに入ることや洗顔をすることにかなり

抵抗がありました。そのお湯が止まって出てこないことはしょっちゅうでしたし、電気もいつ止まるかわからず、とても不安でした。トイレも日本と全然違ってごく一部の裕福な家庭でしかトイレットペーパーを流すことができませんでした。道路や建物もきちんと整備されていないところが多く、道路を走っている日本車の多さにはびっくりしました。裕福な家庭では高級車を何台も所有していましたし、交通の面では車優先なのか人が優先なのかわけが分かりませんでした。バスの中には車掌の他にもう一人の乗務員がいて、その人が行き先を教えて料金を徴収していました。また個人バスというものがあって、バンやワゴンボックスカーでバス経営しているのも驚きでした。生活様式も日本と全然違っていました。その中には正直、日本と比べものにならないくらい未発達な面もありました。帰国してから日本がいかに便利で裕福な国か、日頃の贅沢さを思い知らされました。

わずか一週間のサハリン生活でしたが、この期間中に私はアメリカや日本と全く違う世界を垣間見、そこで生活している人々の価値観に触れてたくさんのことを学ぶことができました。また世代の違う人たちと触れ合うことの大切さや楽しさ、サハリンで知り合えた人達との心温まる交流は、日本にいてはなかなか体験することのできない貴重なものでした。今、私は帰国してからもこの旅で出会った人たちと連絡を取り合っています。特にサハリンでお世話になった人とはメールをしたりして楽しんでいます。「将来またサハリンへ行ってみたいか？」と聞かれれば、いつかホームステイでお世話になった家族の人たちに会いに行きたいと思っています。「都合のよい時にいつでも来てください」と話していたので、今度行く時はロシア語を勉強してから行きたいと考えています。まだまだ書き足りないくらいたくさん思い出を作ることができ、多くの人たちとの出会いから感動をもらいました。

ありがとう！スパシーバ（Спасибо!）

安田ゼミは、今年の4月に開室した出来たてホヤホヤの研究室です。Webデザインを主軸にグラフィック、DTP、映像、3DCGなどの制作系とWebマーケティングなどのビジネス系を分野としています。現在、4年生は3DCGを使ったムービー制作、3年生はWebサイト制作を行っています。単にデザインといっても作品を作るだけに終始しているわけではありません。デザインする前・後の過程も重視します。つまり、企画と設計と評価です。目的もなく何かを作ろうとしても何の意味も成しません。何のために作るのか。作ってどう役に立っているのか。作ったものは目的通りの結果を生んでいるのか、を常に学生には考えさせるようにしています。

加えて内容は実践的です。まだ実績が作れていませんが、実際の社会に貢献することを目標に、野幌近辺のお店にサイト構築の提案に行ったり、大きいプロジェクトとしては、宇宙関連のサイトへコンテンツ提案を行ったりもしています。また、



他の研究室や、ゼミ生以外の学生とのコラボレーションも積極的に行っています。やる気のある学生にはゼミの枠を超えてチームを組み、企画・提案・制作を行います。ゆえ、1、2年生でも興味があれば135研究室に顔を出してみてください。

(P.S.) Webデザインコンテストで、フリー部門優秀賞(3年 原さん)、技術賞(3年 得永君、鳥浜君)、ビギナー部門努力賞(3年 呂君)を受賞しました。おめでとう！

安田ゼミ

担任 安田 光孝

藤井ゼミ

担任 藤井 敏史

ゼミ

紹介

藤井ゼミでは、ゼミ生が『自分にとって未知のテーマに取り組み、「積極的な学習」を行って、他人に説明できるレベルにまで到達すること』を目標としています。

ゼミ生全員に、本学のwebデザインコンテストへの応募を義務づけているのもその一環です。講義で作り方を学んだだけで終わるのではなく、自らテーマを探し、作品に仕上げる体験は貴重です。



ゼミでは、自ら勉強することの練習台として、3年前から3年生のゼミにMINDSTORMSを導入しています。これは、レゴブロックで組上げた車やロボットなどを自作のプログラムで制御するものです。プログラム自体が、レゴのように部品を組み立てて作成する形態なので、講義でプログラミングに苦手意識を持ってしまった学生には、新たな視点で再挑戦するという意味で、またプログラミングが得意な学生には対象領域を広げるという意味で有効だろうと考えました。

3年生は、レゴに触れるのは10数年ぶりだとか言いながら喜々として取り組みます。自分達でマニュアルを読み、アイデアを出し合って作品を仕上げます。発表会では、アイデアとプログラムを説明し、実際にレゴを動かします。同じテーマでも、個性を反映し意外性にあふれた作品が出来上がることに驚かされます。

4年生は、3年生のときに身に付けた勉強の仕方を活かして、自分で決めたテーマで卒論に取り組みます。プログラム作成を含むことが条件です。

私たちは、今年の9月に誕生した「北海道情報大学インディアカクラブ ボーディ」です。クラブと名乗りながらまだ同好会なのですが、インディアカというスポーツを通して社交性や心身を鍛え、地域との交流を図るという目的で立ち上がりました。

ところで、インディアカとは何か？とお思いになる方もいらっしゃると思います。ここでは、説明交えながら本クラブのご紹介いたします。

インディアカとは西ドイツで考案されたバレーボールのルールによく似たスポーツで、羽根の付いた特殊なボール『インディアカボール』を直接手で打ち合うスポーツです。インディアカボールは、ラケットなどを用いず、直接手で打ち合うことが大きな特徴です。現在、日本国内に約100万人の愛好家がいるといわれています。

インディアカクラブ ボーディは、地域の交流



も含めて北海道情報技術研究所のインディアカチームと合同で練習を行っています。どんなスポーツだろう？ 興味があるという方は、一度見学に来ていただければ幸いです。学生サポートセンター事務室にて練習日などをお知らせしています。最後まで読んでいただきありがとうございます。

インディアカクラブ ボーディ

4年 栖原 良規

写真同好会

2年 中井 香織

クラブ 紹介

今年の夏にやっと立ち上がった、できたてほやほやの『写真同好会』です。5月に『写真が好きな人集まれ』とポスターを貼り、集まるかどうかドキドキでしたが、今は無事に集った12人で活動しています。

今年の蒼天祭では写真展を開き、多くの方に観ていただきました。アンケートも行い、批評していただき、とても有意義な写真展を開催できました。写真展にお越しいただいた方、本当に有り難うございました。掲載している写真は、大学祭の準備風景を撮影したものです。写真と一言にいても、撮影している人の性別や学年が異なるので、見方も考え方も違い、様々な表情が見えてきます。とても面白いです。まさに十人十色なので新しい発見がいっぱいです。他の人から意見を聞いたり、作品を見たりすることは大切なことだと感じまし

た。

写真を撮るということ自体が個人の活動なので、まだ全員での活動は、蒼天祭の写真展だけです。今後はコンクールへの参加や撮影会、作品発表会も積極的に活動し、もっと技術力向上、表現力アップさせたいと思っています。もっともっと魅力的な写真を撮っていきたいです。

写真の知識の有無は関係ありません。部員の大多数もあまり詳しくありませんので、安心してください(笑)。カメラの種類に関わらず写真を撮るのが好き、加工するのが好き、見るのが好き、撮られるのが好き、どれかひとつでも当てはまれば一緒に活動してみませんか？興味のある方は是非、中井までご連絡ください。

neko_pg15@mail.goo.ne.jp



大学祭(蒼天祭)の準備風景

同好会の仲間たち

ロナウジーニョと ドゥンガの街で

情報メディア学科 准教授 隼田 尚彦

2006年8月18日から翌3月13日まで、ウイスコンシン大学ミルウォーキー校(UWM)とリオ・グランジ・ド・スル連邦大学(UFRGS)にて「南米における日系高齢者の居住環境調査」について研究を行いました。

ミルウォーキーは、シカゴから車で約2時間北に位置し、江別とほぼ同緯度にあります。ミラービールの創業地として、ビールで有名な都市です。現在は、大家や野茂が在籍したブルワーズやハーレーダビッドソンの本拠地でもあります。

UWMは、私の専門である環境行動学の世界的拠点の一つで、文化人類学者のAmos Rapoport名誉教授をはじめ著名な先生方が教鞭をとられた大学です。96年から1年間ポスドクとして私が在籍した所でもあり、8年ぶりの訪問となりました。今回は環境認知と高齢者の環境研究で知られ、研究員当時のアドバイザーでもあるGerald Weisman教授や同大学の高齢環境研究所の研究員らと私の調査に関するディスカッションと日米における最近の高齢者と環境に関する研究・実践動向について情報交換を行いました。また、先進的な高齢者施設とF.L. ライトやミースの建築作品をいくつか視察しました。中でも、シカゴの民間団体が運営するMather's Cafeは、私が支援している釧路のNPOや芦別の福祉施設での試みと同様の考えの下で先進的な活動を行っており、大変刺激になりました。

今回の研修の大半を過ごしたUFRGSは、ブラジル最南端、リオ・グランジ・ド・スル(南大河)州にあるブラジルを代表する連邦大学です。UFRGS



インテルナシオナルが優勝した瞬間
(左からタルシシオ教授、ディアス・レイ教授)



は、大学院充実度でサンパウロ大学を抜き、ブラジル1位として評価されています。南大河州は特にドイツ系移民が多く、州都ポルト・アレグリは、どこことなくヨーロッパの雰囲気を持つ町でした。人口規模は札幌よりも一回り小さいのですが、都心部は、東京並の活気に溢れています。この都市は、皆さんもご存じの世界的な著名人を何人も輩出しています。ロナウジーニョやドゥンガがこの町のチーム(グレミオ、インテルナシオナル)の出身なのです。おりしも、私の滞在中にFIFAクラブWカップジャパンが開催され、SCインテルナシオナルが世界一に輝きました。カップ戦の最中は、州知事が、「この日はみんな仕事しなくても仕方ない」と会見で述べたほどで、町中がお祭り騒ぎ。一方、ロナウジーニョの出身チームであるグレミオは、トヨタカップ第4回優勝、第16回準優勝の強豪チームで、町を二分して激しい応援合戦が繰り広げられます。

本研修では、アメリカでスーツケースを破壊されたのを始めとして、ブラジルでは腰とハードディスクが壊れ、航空トラブルや先方のドタキャンなどで調査が相次いで延期・中止になるなどの他、多くの散々な目にも逢いました。しかし、サンパウロでは、ある程度の調査を進めることができた上に、今回の研究に関係した研究者と実務家達のネットワークを構築し、今後の調査に希望を繋ぐことができました。また、同地の援護協会主催で、私の講演会を開催いただきました。

最大の成果(?)は、健康的な食生活と週3回程度の運動による7kgの減量でしたが、既に4kgもリバウンドしてしまいました。しかし、今回の研修での様々な経験は、研究者としての私にとって、多くの示唆を得た貴重なものでした。

最後に、この海外研修の機会を与えてくださった北海道情報大学の教職員の皆様と学生、不在時のゼミ運営を助けてくれた院生達に感謝の意を表して報告を終わります。

留学生の宿泊研修を実施

情報メディア学科 准教授 安田 光孝

平成19年9月10日(月)、11日(火)、留学生宿泊研修として大雪にある青少年交流の家に行ってきました。参加者は、南京大学留学生6名、引率者6名でした。



初日はまず旭川まで行き、お昼に旭川ラーメン村にて昼食後、旭山動物園を見学して夕方には大雪青少年交流の家に到着しました。夜には、留学生が研修室に集まり、今までの6カ月間を振り返ってその反省とこれからの具体的な行動目標について話し合いました。

二日目は朝から旭岳に挑み、といっても、ロープウェイで途中まで登って姿見の池付近をハイキングしてきました。下山後は、美瑛パッチワークの丘に立ち寄り、富良野のファーム富田を見学して、夕方には情報大へ戻ってくるスケジュールで

した。

今回の研修では普段交流の少ない留学生とも話ができ、また、彼ら彼女らの普段の姿や考え方が少しでも垣間見れ、私にとってとても有意義でした。また、旭岳はちょうど紅葉が始まった時期で、まばらに見える緑と赤と黄色のコントラストが非常に綺麗で、また来ようと思わせるものでした。留学生達も久々の旅行を楽しんだようで、特に旭山動物園では、その人の多さと動物の近さに驚きながらも白くまやアザラシを見て、眼を丸くしていました。

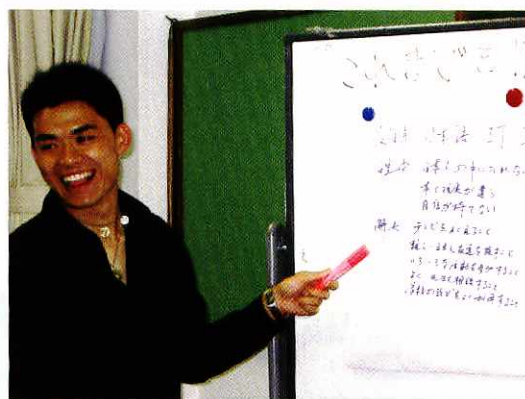


宿泊研修に参加して

情報メディア学科 3年
呂 春意

今回、大学の宿泊研修旅行に参加しました。初めて、活火山を見ました。火山の姿を身近に体験しました。良かったと思います。中国では、こんなみんな一緒に行動する研修旅行はあまりありません。この研修旅行によって日本の文化をまた少し習ったと思います。

今回の研修旅行では、入学からの今までを振り返り、反省会をしました。私達が日本に来てから、だいたい6カ月たった。この6カ月間、私達は始めて来た日本で、困ることが一杯ありました。はじめ、講義はほとんど分かりませんが、情報大学の先生達からいろいろお世話になり、今は大体わかるようになりました。心から感謝しています。生活面でも、最初の時、日本語がほとんど話せま



せんので、食べることや買い物にも困った。情報大学総務課の職員達には朝ご飯の時から寝る時まで、たくさんお世話になりました。私達は情報大学の皆さんに助けられたことにとても感謝しています。今回の研修旅行の反省会を機に、これからもっと授業や日本語をうまくできるようになるために、もっと多くの日本人の学生や先生と深く交流したいです。

日高山脈冒険隊の冒険

多田ゼミが
密着取材



自ら行動し、得られた自信、達成感…
子供達との12日間

平成19年8月1日から12日まで、独立行政法人 国立青少年教育振興機構「国立日高青少年自然の家」企画事業として「日高山脈冒険隊」が開催され、多田研究室のゼミ生がそのドキュメンタリー映像の撮影と制作を行いました。

「日高山脈冒険隊」とは、小学5年生から中学3年生までの子供達30人が全国から集まり、11泊12日で日高→平取→様似→襟裳→広尾→大樹→鹿追→南富良野→日高と、日高山脈一周500kmをキャンプをしながらマウンテンバイクで走破する大アドベンチャーです。

撮影は多田研究室の有志学生で行いました。その中でも4年生の田名部周平君と3年生の木村梨紗さんは、全日程撮影班として（そして私は二人のサポートとして）子供達と12日間、生活を共にしました。田名部君はマウンテンバイクに乗って全行程を走破。常に子供達の近くに位置しその表情を狙い、木村さんは撮影車に乗って、遠景から冒険隊を見守るように撮影しました。他の学生は前半組と後半組に分かれ、様々な角度から子供達を追いました。撮影したテープの本数はじめて50本以上。時間にして450時間以上。私も学生に「無駄に撮るな」と指示しながらも子供達の面白さに我慢できず10本以上撮影してしまいました。二人はその膨大な映像を編集し、3分間の短編作品と1時間の大作を作り上げました。

（報告：情報メディア学科 准教授 安田光孝）



■全日程撮影班：4年 田名部周平/3年 木村梨紗
■前半撮影班：3年 古山江梨/3年 朱輝/3年 上野紘史
■後半撮影班：3年 福井彩恵/3年 佐藤賢児



3年 木村 梨紗

4年 田名部 周平

普通に生活していたら味わえない体験をしたい、という思いから日高山脈冒険隊に参加しました。最初は楽しければそれでいいと思って出掛けましたが、そこで待っていたのは予想以上に大変な時間でした。けれど大変だった分、多くのものを得ることができたと感じています。

待っているだけじゃなく、行動しなくちゃだめなんだ。それが一番この夏感じたことです。何かに迷っている人がいたら、とりあえず行動に移してみてください！

最初は軽い気持ちで参加したこの日高山脈冒険隊。終わってみると、なぜ去年も参加しなかったのかと後悔しています。単純に12日間キャンプをしながら、500kmもの距離を自転車走破すること自体がいい経験になり、そのうえその中で成長していく子供達の姿を間近で見るといのは、本当に感動する素晴らしい体験でした。こういった中身の濃い経験をするのは、これからの人生で間違いなく1つの自信になると思います。

ポスターあらわる！ -学内に貼り出されたポスターの謎-

学内に突然出現したポスター達。皆さんはもうご覧になったでしょうか？実はこれ、我が校の学生が制作した物なんです。我が校で始まった「挨拶運動」の一環として、日常においてコミュニケーション力を身につけよう、相手とのコミュニケーションをより考えて礼儀正しい学生になろう、という考えのもとに企画されました。

そして、なぜこの三人が選ばれたのか…。メディア学科の中でも、デザイン好きのこの三人。監督の先生から「作ってみないか？」と声がかかって、夏休みを返上して三人で意見を出し合いながら出来上がった作品です。「情報大学の学生は挨拶ができて素晴らしい。」と言われるように一人一人意識を高めていけたらいいですね。



情報メディア学科 二年
杉澤 愛美

ひとこと

「顔を隠した二人はお互い知り合っていない状態の人たち。そんな中でも挨拶は交流のきっかけとなる。というメッセージをこめました。」

情報メディア学科 一年
黒田 学

ひとこと

「『挨拶は、人と人との心の架け橋』というコピーをもとにしています。二つの主塔が人間を表す、斜張橋となっています。」

情報メディア学科 二年
伊藤 佳祐

ひとこと

「可愛いイラストで、見た人にすぐ伝わるように見やすく、明るくしました。固いイメージをなくそうとしたところがポイントです。」



学生サポートセンターより

平成19年度 保護者と教員との懇談会

平成19年度の保護者と教員との懇談会は、9月8日(土)3学年の保護者を対象に、9月29日(土)、1学年の保護者を対象に本学会場において行われました。

3学年の保護者懇談会では、学長より本学の現状についてご報告申し上げ、立花就職部長より就職指導の基本的な考え方、本学の就職支援体制、就職指導スケジュール、求人動向、就職活動上の留意事項等就職に関する詳細な説明がなされ、次いで個別懇談におきましては各学部・学科の教員と保護者との間で、学生の成績、学生生活、就職の状況について率直な話し合いがなされました。あわせて、学生サポートセンター事務室において、就職相談コーナーを活用して保護者の皆様に個別の相談等に応じました。

1学年の保護者懇談会については、学長から大学教育についてのご報告に続き、加納教養主任よ

り1学年の現状について説明がなされ、引続き木田教務課長より、成績表の見方・修得単位の目安・進級の条件等について説明がなされました。その後、各クラス担任教員と保護者が個別に学生の修学状況、成績等について面談を致しました。また、教務課においては、保護者に各学生の講義の出欠状況をご説明申し上げました。

保護者の皆様のご関心は、学生の学業と学生生活の現況、卒業後の進路・就職活動です。ご多忙にも係わらず本学へお越し下さいまして、また、本会にご参加いただきましたことを感謝いたします。

本学で学ぶ学生の学生生活が一層充実したものになるよう努めて参ります。今後とも、保護者の皆様にはご意見・要望をお寄せいただきたく、並びに本学に変わらぬご理解とご支援を下さいますようお願い申し上げます。



学長のあいさつ



1学年生の保護者の皆さまおよび教員

◆◆教職員の動向◆◆

<教員>

| | | |
|------------|-----|-----------------|
| 採用(9月1日付) | 教授 | 小山 芳一(医療情報学科) |
| 退職(8月31日付) | 教授 | 大島 康彰(情報メディア学科) |
| (9月14日付) | 教授 | 上原 士郎(情報メディア学科) |
| 昇任(10月1日付) | 准教授 | 長尾 光悦(医療情報学科) |

◆◆主要行事(8月2日~11月20日)◆◆

◇法人本部◇

| | |
|-----------|--------------------------------------|
| 8月24日(金) | 教職員「健康診断」 |
| 9月22日(土) | 「えべつものづくりフェスタ2007」参加 (北海道電力総合研究所) |
| 10月11日(木) | 理事会 |
| 11月2日(金) | 北海道高齢・障害者雇用促進協会「高齢者雇用調査」 |
| 12日(月) | 札幌東税務署「e-Tax Pr」 |

◇大 学◇

| | |
|-----------------|--|
| 8月20日(月)~24日(金) | 公開講座「ゆっくりのんびりWORDに挑戦 (全5回)」 |
| 9月2日(日) | AO入学試験(B日程) |
| 8日(土)~22日(土) | 公開講座「プログラミング入門 —JavaScriptを通して—(全3回)」 |
| 8日(土) | 保護者と教員との懇談会(3年次保護者対象) |
| 14日(金) | 経営情報学部教授会 情報メディア学部教授会 |
| 18日(火) | 後期開講 公開講座「骨粗しょう症について学ぼう —診断と予防について—」 |
| 28日(金) | 全学教授会 |
| 29日(土) | 保護者と教員との懇談会(1年次保護者対象) |
| 10月5日(金)~26日(金) | 公開講座「旅行で使える中国語(全4回)」 |
| 7日(日)~8日(月) | 蒼天祭 |
| 10日(水) | ハラスメント啓発学習会 |
| 12日(金) | 医療情報学科説明会 |
| 13日(土) | 編入学試験(一次募集) 公開講座「デジタルカメラの基礎②」 |
| 13日(土)~14日(日) | AO入学試験(C日程) |
| 19日(金) | 経営情報学部教授会 情報メディア学部教授会 |
| 22日(月)~26日(金) | 中学生職場体験受入れ(江陽中学校4名) |
| 26日(金) | 全学教授会 |
| 30日(火) | 特別講演会「IASBの最近の動向—コンバージェンス の現状と展望を中心に—」 |
| 31日(水) | 「バイオ・医薬プロジェクト」キックオフミーティング |
| 11月4日(日) | AO入試 |
| 7日(水)~8日(木) | 公開講座「フォトショップ始めの一歩② (全3回)」 |
| 9日(金) | 経営情報学部教授会 |
| 16日(金) | 情報メディア学部教授会 |
| 20日(火) | 公開講座「免疫と病気 —体をまもる仕組みと病気について—」 |

◇大 学 院◇

| | |
|------------------|-----------------|
| 8月27日(月)~9月6日(木) | 大学院入試(一次募集)出願期間 |
| 9月14日(金) | 学位論文等中間報告会 |
| 15日(土) | 大学院入試(一次募集) |
| 19日(水) | 大学院入試(一次募集)合格発表 |
| 25日(火) | 大学院研究科委員会 |
| 11月20日(火) | 大学院研究科委員会 |

◇通信教育部◇

| | |
|-----------|---------------------------------|
| 11月14日(水) | 学校法人名護総合学園名桜大学北部生涯学習推進センター 大学見学 |
|-----------|---------------------------------|

◆◆広報活動◆◆

<北海道情報大学通信教育部 入学説明会;本学独自>

8月;1会場(新潟)

9月;2会場(東京、本学)

<北海道情報大学通信教育部 合同入学説明会;私大通教主催>

8月;2会場(大阪、名古屋)

9月;3会場(東京、福岡、札幌)

<進学相談会>

8月;北海道 7会場(函館、札幌(2)、旭川、北見、釧路、帯広)

9月;北海道 3会場(小樽、室蘭、苫小牧)

青森県 2会場(青森、八戸)

岩手県 1会場(盛岡)

秋田県 1会場(秋田)

11月;北海道 12会場(岩見沢、小樽、滝川、旭川、留寿都、苫小牧(2)、

函館、札幌(2)、留萌、北見)

<高校内ガイダンス>

8月;北海道 3校(訓子府高校、池田高校、帯広三条高校)

9月;北海道 3校(札幌真栄高校、旭川凌雲高校、北星学園大学附属
高校)

埼玉県 1校(小松原高校)

千葉県 1校(敬愛学園高校)

10月;北海道 6校(札幌拓北高校(2)、有朋高校、富良野高校、北海道
栄高校、士別高校)

東京都 2校(関東第一高校、東京実業高校)

11月;北海道 9校(旭川明成高校、札幌篠路高校、札幌藻岩高校、

江別高校、小樽桜陽高校、岩見沢西高校、北広島西高校、

恵庭南高校、旭川南高校)

埼玉県 1校(浦和学院高校)

<高校出張授業>

8月;北海道 1校(石狩翔陽高校)

10月;東京都 1校(東京高校)

栃木県 1校(作新学院高校)

11月;千葉県 1校(西武台高校)

群馬県 1校(桐生第一高校)

<高校訪問>

8月;東京都 2校、神奈川県1校、埼玉県1校

9月;北海道 268校、青森県30校、岩手県30校、秋田県29校、東京都15
校、埼玉県5校、千葉県7校、神奈川県7校、栃木県1校、群
馬県2校

10月;北海道 26校、東京都6校、埼玉県8校、千葉県1校、神奈川県2校

11月;北海道 37校

<AO入試・奨学金説明会>

8月6日(月) 本学

9月9日(日) 本学

<オープンキャンパス>

8月3日(金) 北見、釧路

8月4日(土) 旭川、帯広、函館

8月26日(日) 本学

10月7日(日) 本学

11月11日(日) 本学

<広報室来学者>

8月2日(木) 函館商業高校(教員2名)

8月5日(日) 南幌高校(学校見学:学生1名)

8月12日(日) 枝幸高校(学校見学:学生1名、保護者1名)

9月13日(木) 江別高校(大学見学会:学生361名、教員10名)

9月15日(土) 函館西高校(大学見学:学生1名)

9月21日(金) 野幌高校(学校見学会:学生34名)

10月3日(水) 札幌拓北高校(教員1名)

10月5日(金) 札幌創成高校(大学見学会:学生21名)

10月10日(水) 札幌東陵高校(大学見学会:学生3名)

11月8日(木) 新篠津小学校(大学・研究所見学:児童(5年生)41名、

教員3名)

11月8日(木) 旭川竜谷高校(大学見学会:学生21名、教員1名)

11月13日(火) 札幌稲西高校(大学見学会:学生15名、教員1名)

11月19日(月) 札幌稲北高校(大学見学会:学生40名)

編集後記

本学では、様々な改革が始まっています。経営ネットワーク学科が先端経営学科に変更、医療情報学科にコース制が確立、システム情報学科にロボット組み込みコースが増設、情報メディア学科に専攻制が導入されます。また、本誌には、学生諸君の投稿を奨励しています。未来に向かって生まれ変わろうとしています。教職員学生の三位一体の活躍が期待されます。

(S)